

<書 評>

秘話： フランクリン・ルーズベルト、コーデル・ハル、サムナー・ウェルズ

アーウィン・ゲルマン著

ジョンズ・ホプキンス大学出版会 1995

書評： タダシ・ハマ（日本語訳「発信する会」）

「私が奇術師だということは知っているだろう。私は、自分の左手のしていることを右手には知らせないことにしている。矛盾しているように聞こえるかも知れないが。私は戦争に勝つのに役立つならば、人を騙すことでも、嘘をつくことでも平気な男なのだ」

——フランクリン・ルーズベルトが1942年に、財務長官ヘンリー・モーゲンソーに語った言葉

著者アーウィン・ゲルマンは、独立した歴史家である。その著作である第2次世界大戦前後の米国の三人のリーダーの伝記は小説のように面白い。初めから終わりまで、3人の主役（フランクリン・ルーズベルト大統領、コーデル・ハル国務長官、サムナー・ウェルズ国務次官発言）とその擁護者、および中傷者からの引用ばかりで成り立っている。ゲルマンは前々から、「小説家が虚構を作り上げるのは難しいことではない。書いているうちに、必要に応じて話がうまくつながって来るからだ」と言っていた。よく眺めてみると、この物語は、話がうまくつながり過ぎている観がないでもない。重要な出来事を都合に合わせてカットしてしまっているのだ。

たいていの人にとって、概して人生というものは平凡なものであり、他人とのかかわり合いは孤独な出来事なのである。

それとは対照的に、ゲルマンの話は、書かれるのを待っているNetflix社（動画配信サービスの会社の名）のドラマのようなものである。彼の話は、グルになった三人の陰謀に尽きる。まずは、日本とドイツに戦争を仕掛け、アメリカ中心の世界秩序を建設しようと試みた張本人のルーズベルト。次が、その忠

実なそかし無責任なハル国務長官。最後がハルの密かなホモセクシャルの愛人ウェルズ。ハルはウェルズを軽蔑していた。このウェルズが大統領に外交政策の助言をしていたのだった。

重要な点に十分な注意を払わないと本のストーリーはあまりにも都合の良いものになってしまうのだ。ルーズベルトは日本の陰謀には全く無知であり、日本を刺戟して真珠湾攻撃を仕掛けさせることなど全くないという。ゲルマンは正統派の論に忠実で、ルーズベルトが日本の奇襲が迫っていることを知っていたとする仮説をことごとく「誤解」であり「短絡的」であるとして斥けている。ゲルマンはさらに、問題をぼかすことを言っている。ルーズベルトにとって関心があったのはヒトラーとムッソリーニであり、太平洋の問題はどうしてもよかったと言うのである。そして、日本のことに触れると、「重要なヨーロッパの問題から目を逸らさせることになる」から、どうしてもいいという態度を取ったというわけだ。

1940年までに、米国は日本の暗号化された外交文書の解読に成功していた。だから、最高司令官ルーズベルトは、日本の海外戦略を熟知していた。それを熟知していたから英国に味方してヨーロッパ戦線に介入しようという戦略に到達したのかどうかを本書は全く教えてくれない。

まだ他にも著者が語ってくれないことがある。

ルーズベルトは、1941年中葉に日米間の空隙を埋めるために近衛文麿首相との首脳会談を行うことに最初は積極的だったのに、なぜ最後にはこれを斥けるに至ったのだろうか。

ルーズベルトが真珠湾前夜に昭和天皇に書簡を送って、日本の「侵略」について抗議したのはなぜだったのだろうか。

1941年11月25日、米国戦争内閣の閣議で、ルーズベルトは、「彼ら（日本）に最初の一発を打たせるように仕向けよう」と発言したが、その真意は何だったのだろうか。

1941年12月6日、日本からの「これ以上の交渉を拒絶する」という解読電報を読んだルーズベルトは、「これは戦争を意味している！」と叫んだ、この発言はどういう意味だったのだろうか。

ルーズベルトはひたすら、米国の世論も日本側も誰も望んでいない戦争に米国を引きずり込でしまった。その盲目的な決断について、本書は詳細に説明できるせっかくのチャンスを逃してしまった。日本がパールハーバーを攻撃するずっと以前から、ルーズベルトは米軍パイロットが中華民国に味方して日本と戦うことに反対していなかった——米国の中立法に違反してまで。

このような矛盾が故意で引き起こされたのかどうかは、本書の著者だけが答え得る問題だった。

著者が触れなかった部分、矛盾点を解決できなかった部分も、ほかの解釈もできる。たとえば、1937年12月12日に、南京の近くの河で米国船パナイ号が中華民国と交戦中だった日本海軍に撃沈された。これを聞いたルーズベルトが「武力による報復を考慮」していたと本書は伝える。この問題は日本側が正式に謝罪し、補償をしたために決着が付いた。パナイ号が攻撃されていたちょうどその時期、日本陸軍は中華民国の首都だった南京を占領しようとしていた。本書は、ルーズベルトもハルも、日本の「南京大虐殺」について、何らかの発言をしているとは書いていない。ルーズベルトの生い立ちが中国と関係が深かったことを考えると、いわゆる「南京大虐殺」について、なぜ彼が何も発言しなかったのかと訝らずにはおられまい。ここから出て来る結論は二つしかない——ルーズベルト政権が「南京大虐殺」を重視していなかったか、あるいはもっと可能性があるのは、そもそも「南京大虐殺」など存在しなかったという結論である。

ゲルマンは、ルーズベルトがアジアには「全く関心を」持たなかったという一方で、説明なしに「中国との接触を深め」たいと望んでいたと主張する。実際、他の部分を読んでみれば、ルーズベルトが中国を高く評価し、日本と日本人に対しては生理的な嫌悪感を持っていたことが理解できる。例えば、他の部分には、

ルーズベルトが中国を好きになったのは、母方のデラノ家¹を通してのことだったと書いてある。祖母と母はかつて中国に居住していたことがあり、その話をしてくれるのを彼は熱心に聞いた。また他の部分では、ルーズベルトが日本民族の「遺伝的欠陥」を「人種交配」²によって治癒させてやろうと考えていたことを教えてくれる。しかし、ルーズベルトにとっては、「日本人とヨーロッパ人の交配」は「甚だしい悪」であった。彼の見解は、スミソニアン研究所のアレス・ハードリチカ教授から吹き込まれたものだった。この教授は、日本人は「発達が遅れている」から「極悪」なのだと信じていた。ルーズベルトは、前述のような問題について、ハードリチカ教授を相談相手にしていた。

ゲルマンはルーズベルトの弱点にも触れている。たとえば、妻エレノアの個人的秘書だったルーシー・マーサーと長期に渡る性交渉を行っていた。フランクリンが海軍次官補だったときに、その事実がエレノアに発覚し、彼は二度と彼女には会わないと約束させられた。しかし、大統領の任期が終わる間近に、彼は頻繁にルーシーと秘密の逢瀬を楽しんでいた。ルーズベルトがジョージア州ウォームスプリングズで逝去した時には彼女が傍らにいた（すぐに追い出されたが）。自分が愛人を持つことには良心の咎めを感じなかったルーズベルトだが、エレノアが社会扇動家の「若い」ジョセフ・ラッシュと情事を持った時には、「激怒」した。³

ルーズベルトの死に際しては、面白い逸話がある——ゲルマンは「世界中から弔電が殺到した」と述べている。本書には述べられていないが、日本までもが弔意を表した。東京の日本語放送局はこう言っている。「我々はルーズベルト大統領の死を聞いて悲しんでいる。全世界がこのような混乱状態にある時期に大統領が亡くなるうとは思いませんでした」⁴ 米国の国民が嘆き悲しんでいるときに、日本がこのような敬意を表したということは、日本人は人間以下だと罵倒する西欧

¹ J. ブラッドリー(2015) *The China Mirage* ニューヨーク州ニューヨーク市 Little, Brown and Company

² ジャンセンズ R.V.A. *What Future for Japan?* ジョージア州アトランタ市 Rodopi 社

³ <https://www.washingtonpost.com/archive/politics/1983/12/12/secret-hoover-files-show-misuse-of-fbi/6ba74dc7-a6b7-447b-95a1-ea2ff28ecacc/>

⁴ 「ライフ」1945年4月23日号

の戦時の宣伝文句に反証を示すものだった。それに反して、日本人の遺体の一部を記念品として本国へ送る米兵の習慣について、ルーズベルトが非難したという記録は本書の中には書かれていない。

ルーズベルトが外交政策を決定したと言え、読者は、ハルは大統領の使い走りに過ぎなかったと思うかも知れない。本書を見る限り、読者のそのような印象は正鵠を射ている——ハルは日米戦争を引き起こすような行動にはほとんど関与していない。かの悪名高き「ハルノート」もそうだ。日本との平和を維持するための米国の要求を列挙した文書だが、これはソ連のスパイで財務省の高官だったハリー・デクスター・ホワイトが書いたものだった。しかも、ホワイトは上司であるモーゲンソー長官からこのメモの承認をもらい、モーゲンソーはこれをルーズベルトに送った。⁵

ルーズベルトの取り巻きは、裕福な家庭に育った人物が多かったが、ハルは一味違った。テネシー州出身で、エリートの私立学校やアイビーリーグの大学を出ているわけではなかった。ハルは肺結核の診断を受けたことがある（ひょっとしたらサルコイドーシス〈肉芽腫が臓器に認められる疾患〉だったかも知れない）。肺結核にかかると、長期にわたって仕事を休まなければならない場合が多い。（ハルが休んでいる間、ウェルズ次官が國務省の日常を仕切っていた）本書は、ハルが國務長官に任命されたのは、政治的に強力な南部の共和黨員を懐柔することが目的だったに過ぎないと指摘している。この連中の支持がなければホワイトハウスを掌握することができなかつたからである。事実、ハルは1940年の大統領選挙に、ルーズベルトご指名の後継者として出馬するつもりだったので、國務省に留まることは考えていなかった。ところが、ルーズベルトが裏切って三選を目指すことになったので、あてが外れてしまった。ハルは生涯、怒りで煮えたぎっていたが、沈黙を守った。

ゲルマンの物語の最後の登場人物は隠れホモセクシャルのウェルズである。その性的嗜好のせいで当時はセキュリティリスク（安全保障上の問題）があると見

⁵ J. コスター *Operation Snow* ワシントン DC Regnery 社

做されていた。ルーズベルトは、FBI のジョン・エドガー・フーバー長官に調査を依頼した結果、ウェルズにその問題があることを知った。ルーズベルトは、ホモセクシャルを嫌悪していたが、何も措置を取らずに、ハル長官にウェルズとの交渉を任せた。ハルは、政策に関して、ウェルズが自分の頭越しに、直接ルーズベルトと話をするのでウェルズを憎むようになった。そして、ウェルズを辞任させるために、周囲の人にこの性的な秘密を漏らすという卑劣なことをした。ウェルズは行政官としてはハルよりも先輩だったのに、結局1943年に辞任することになった。

本書を読んだ読者は、何はさておき、歴史の転換点にあつて、世界の行く末を左右する力を持っていた米国の権力者たちが精神的・道徳的に信頼し得る人物であったかどうかを篤と考える必要があるのではなかろうか。